

世界の中の日本 in Sport

小笠原悦子¹⁾

Japan in the World in Sport

Etsuko OGASAWARA

Key words : 世界女性スポーツ会議, IWG, ブライトン宣言, IOC ダイバーシティ

1. はじめに

第5回世界女性スポーツ会議が、2010年5月20日～23日の4日間、オーストラリアのシドニーのダーリンハーバーにて、60の国と地域から500名が参加し、盛大に開催された。本学からもこの主催団体である国際女性スポーツワーキンググループ（通称IWG）のメンバーとしての筆者と、佐藤馨准教授、そして3年生の内海沙織が参加した。世界における女性スポーツのムーブメントの変遷を紹介し、そしてそのムーブメントにおける日本の役割について論じる。

2. 世界女性スポーツ会議の変遷と日本開催までの経緯

第1回世界女性スポーツ会議は、1994年にイギリスのブライトンで開催された。この会議の存在が注目されるようになったのは、国際オリンピック委員会（IOC）の貢献が大きい。すなわち、この第1回会議の結論でもある「ブライトン宣言」に、IOCが署名をし、「すべての女性が公平にスポーツに関わることのできるスポーツ文化を構築する」という究極の目標へ向かい、積極的にIOCが動き出したからである。

具体的には、IOCは、10年間（1996～2005年まで）に、スポーツに関わる全ての組織の、意志決定機関における女性の比率を、少なくとも20%以上にすることを、世界中にピ

ーアールしたことである。

このスポーツ界における新しいムーブメントは、国連による女性の人権を擁護するムーブメントとも上手に連動し、急速に進展していった。

4年後の1998年に行われたアフリカのナミビアで行われた第2回世界女性スポーツ会議では、次回2002年はアメリカ大陸（カナダ）、その次の2006年はアジアで世界会議が開催されることが発表された。このNewsは、当時、米国で博士号（スポーツマネジメント）を取得し帰国したばかりで、偶々この会議へ参加した私にはあまりにも刺激的なNewsであった。しかしながら「こんな政府レベルで開催する世界規模のイベントをアジアではどの国が開催するのだろうか？」という大きな疑問が頭を過ぎった。また一方で、その直後に会場で聞いたショッキングな事実は、2006年の担当大陸である「アジア」には、アフリカをも含む他大陸で急速に進展していた女性とスポーツのムーブメントは全く起こっていないという事実であった。

そこで、女性とスポーツというアジアでは未開のムーブメントを起こすために、2006年第4回世界女性スポーツ会議を日本へ誘致する決意をした。なぜなら、スポーツマネジメントにおいて語られるソーシャルアイデア（社会的な考え方）という非視覚的プロダクトを、「世界会議」というイベントという形式に変換し、一般の人々へ目で見えるものとす

1) 競技スポーツ学科



図1. 熊本協働宣言のシンボルの書

る（視覚化する）という理論を実現することが可能だと考えたからである。すなわち、4年にも及ぶ長期の（事前PRを含む）準備期間よび会議本番にて、一般の人々へ、このソーシャルアイデアというプロダクト（女性とスポーツのムーブメント）のイメージを視覚化させ、その重要性に気づいてもらえると考えたからである。

1998年当時、このムーブメントを推進するアジアのリーダーは日本以外には考えられなかった。そこで、具体的には、NPO法人（JWS）を立ち上げ、第1回アジア女性スポーツ会議を大阪で開催し、その場に世界中のリーダーを招き、日本オリンピック委員会（JOC）の協力の下、日本がそのムーブメントの中心となり得ることを証明した。また、同時に、熊本市が世界会議への立候補を決意し、2006年の世界会議誘致にも成功した。

その後は、JWSが「2006世界女性スポーツ会議くまもと」の事務局として、また同時にアジア女性スポーツムーブメントの事務局として、2年に1回の頻度で、アジア女性スポーツ会議をカタール、イエメンという女性とスポーツの発展が急務であった国々との共同作業でアジア女性スポーツ会議も実現した。

3. 「第4回世界女性スポーツ会議」とスポーツにおける世界の中の日本の役割

2006年5月11～14日、熊本市にて第4回世界女性スポーツ会議を開催された。アジア



図2. 「2006世界女性スポーツ会議くまもと」における熊本協働宣言の発表後のシーン

初、地方行政（熊本市と熊本県）がJOC、NPO（JWS）と共催するというユニークな国際会議は、史上最多となった100の国と地域から700名の参加者を得、大成功に終わった。

熊本会議の結論は、日本語で発表された。「協働」という漢字である（図1、2参照）。国際会議の結論は英語が当たり前だと思っている人たちは度肝を抜かれた結果となったはずである。しかしながら、Asian Spiritを兼ね備えた日本人が、世界会議を仕切り、スポーツにおける世界の人々の将来を考えたときに、この「協働」という魂を備えた書が結論の中核となった。世界中の参加者からの賛同を得ることに成功した瞬間であった。正式な日本語の結論は「熊本協働宣言」と呼ばれ、英語では、「Kumamoto Commitment to Collaboration」となった。

世界の中で一目置かれるためには、ダイバーシティ（多様性）に価値を見出すという概念の理解が必須である。スポーツ界において、そして島国日本においてはこの概念の重要性を認知することが欠如している。なぜなら、そのための十分な教育がされていないからである。

スポーツにおける世界の中の日本は、その構成員である日本人が、ダイバーシティという概念に価値を見出し、その中で、日本が保有する独特の自然、歴史、文化、習慣を日本人自らが尊重するとともに、世界から貴重であると思われ続ける努力が必要である。